

◆実践問題10◆

2 = 筆者

鈴木竜は、糸竹の交はりにて、年ごろ親しく語らひ

ぬる仲なりけるを、この夏のころ、いささか心得ぬこ

とのありければ、行きて言ひたださばやと思ふ折か

ら、いと重く患ふと聞けど、常にか弱き人にもはべら

ねば、ほどなくおこたらん折にこそと思ひて、うち過

ぎぬるほど、にはかに弱くなりて、つひに身まかり

ぬ、齢は今年五十とか聞きし、よろづたどとしから

ず、呂律のことなどいとうよう心得たる人にて、かばか

りなるも、たづねんにはいとかたかるべし。惜しみつ

つせんすべなくて月日を経るに、こよひ雪いと深う

降りて寒ければ、とく臥しぬ。暁がたの夢にこの人訪

ひ来と見て、「身まかりぬと聞きしはそらごととなりけ

- 1回目
- 2回目
- 3回目
- 4回目
- 5回目

り。重く患ふに、いかでかいませし」と言へば、「対

面せでは、心のむすばほれ解くべきやうも侍らず。心

一つをしるべにて」と言ふ。いと苦しげなり。かの心

得ず思ひしこと言ひ解くとぞ思ひし。